



宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の役割	永田雅輝
着任のご挨拶	笠原秀昭
「JICA青年招へい事業」における宮崎県の受入れ	岩元巖男
雑感	吉山武敏

# 宮崎県 J I C A 派遣専門家連絡会の役割

宮崎県JICA派遣専門家連絡会

会長 永田雅輝 (宮崎大学農学部教授)

平成15年度総会(平成16年3月12日開催)におきまして会長職を拝命してから早くも1年になります。昨年度(2004年)は、宮崎県JICA派遣専門家連絡会が1994年に発足してから丁度10年目の節目でした。この機を理由に、初代会長玉井理先生からの引継ぎを淡々と受けて2代目の会長に就任したことが今となって悔やまれ、その重責をひしひしと感じているところであります。

本連絡会は、言うまでもなく、JICAの技術協力の担い手として開発途上国の最前線で活躍された宮崎県内在住の専門家の方々(帰国専門家)のネットワーク(連絡会)です。当方は、1994年の発足当時から会員として、微力ながら会の運営に側面的に関わって参りましたが、その当時を振り返れば、会員名簿に記載されている会員はわずか18名でした。それが年を経るごとに帰国専門家の数も増え、現在では会員56名規模の連絡会となりました。その内訳を概略的にみますと、大学関係者20名、国立機関関係者14名、地方機関関係者7名、企業・自営・その他関係者15名の会員構成です。派遣国は東南アジアが最も多く、その他は中南米、アフリカ等です。派遣分野は、農業分野(作物、畜産、獣医、水産他)が最も多く、その他では医学、教育等です。細かく派遣国や専門分野をみますと多数にのぼり、多彩な専門家の集団と言えます。

このように本連絡会の会員は、ODA現場での経験者として、また国際協力の理解者として、会員がそれ

ぞれのノウハウを体験していますことから、地域(宮崎県)における様々な国際交流活動に取り組む場合の協力者あるいは支援者としては、十分な知識と経験を持った集団であり、地域から期待されます。このことから、本連絡会が、いような国際協力支援の場面で貢献することは、凄く意義ある役割と考えます。

また、世界的にグローバル化が進む中、物作りの急速な展開を押し進めるには、開発途上国での高等教育の質的向上が必要であることから、近年、この方面の技術協力、支援活動がクローズアップされています。折しも、2005年2月号のFRONTIERには、“途上国の「知」を生み出す力を”の特集記事が掲載されておりました。本連絡会では4割弱の会員が、この特集記事に関係する高等教育協力を携わった専門家がありますことから、県内に存在する大学との連携を図りつつ、この方面での貢献が出来るとなれば、本連絡会の果たす役割は一段と大きいものになると言えます。

この他、JICA国内機関、青年海外協力隊OB/OG会、県内国際交流協会・団体等と連携しつつ、県内地域での国際協力・交流に関する活動に積極的に取り組むことで、会員並びに会員外とのネットワークを強めて、本県の国際協力の推進に一役を果たす役割をも担うものです。

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の活動が、今後も益々発展いたしますよう、関係各位の皆様方のご配慮をよろしくお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶

独立行政法人国際協力機構九州国際センター

所長 笠原 秀 昭

「JICAエキスパートみやぎ」(宮崎県JICA派遣専門家連絡会)の第7号の発刊に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

私は、本年1月1日付で前任の山口三郎の後任として九州国際センターの所長になりました笠原秀昭と申します。九州国際センターに来る前は、皆様も専門家として派遣される前に一度は行かれたかと思いますが、東京・市ヶ谷にあります国際協力総合研修所に居りまして、JICAのインハウスコンサルタントとも言うべく国際協力専門員、国別・地域別や分野・課題別の調査研究、専門家派遣前研修や人材養成、等の業務に携わっていました。

実際には1月7日に九州国際センターに着任しまして、それ以来、ここ1ヶ月の間に九州国際センターが所管いたします九州7県と北九州市、福岡市、その他様々な事業で関係する団体や機関の方々と、ご挨拶と意見交換をする貴重な機会を得ました。

私自身は、正直言いますと九州地域と地縁も血縁もない者です。強いて申し上げますと、昔も昔、大学生の時にサークルの先輩と一緒に九州一周の自動車旅行をした思い出があるぐらいです。今や記憶も断片的ですが、鹿児島県の海岸縁でキャンプを張って、夏休みの子供たちのラジオ体操の声で眼を覚ましたとか、宮崎県の日南海岸を走り回ったとか、です。

今回は仕事で駆け足とは言いながらも、前回の学生時代とは違う、色々な方々との意見交換、お話を聞き、夜お酒を飲みながら話をする機会は本当に貴重な、そして私にとって最初の勉強の機会でした。

ここ10年余りJICAはその事業展開において、開発途上国で仕事をするのはもちろんですが、国内においても、途上国でのより良い事業展開をするためには国内の基盤・リソースを強化することが必要で

あり、また、国民参加型の事業を推進するために様々な施策を実施してきました。基より、研修員の受け入れ事業は国内の研修機関にお願いして技術研修を実施しているのであり、専門家派遣は本邦の専門家の持っている専門技術を途上国で活かしていただいているのですが。

具体的には、国際協力推進員の九州全県への配置により、これまでJICAの出先・窓口がなかったところにおいても、JICAとの意思疎通を飛躍的に増やすことが出来、更に彼らの日々の活躍によりJICAが進めようとしている国際協力の理解・市民参加の推進に大きく貢献していると思います。また、草の根技術協力の推進により地元の自治体やNGOと言った機関と、それぞれが持っているリソースの活用により研修員の受け入れや専門家の派遣と言った技術協力の推進が可能になり、成果を挙げているということは非常に素晴らしいことだと思います。それだけに、今回各県を回り、それぞれの思いの丈・要望をお聞きし、意を強くすると同時に身の引き締まる思いをしました。

これまで述べてきましたJICAが九州の各地で展開している事業の全てに通じているのは、正に「派遣専門家連絡会」であり、そこに集まっている「JICA専門家」の方々ではないかと思います。その意味ではJICA事業の地方展開においてなくてはならない存在だと思いますし、現にその一翼を担っていただいているものと確信いたします。

「宮崎県JICA派遣専門家連絡会」が今年で設立11年目を迎え、益々充実した活動をされることを祈念すると同時に、JICAの今後の事業展開に当たっては是非とも強力なサポートを賜りますようお願いしまして、私の着任のご挨拶させていただきます。

# 「JICA青年招へい事業」における宮崎県の受入れ

(財)コースワーカー能力開発協会

宮崎県支部長 岩元 巖 男

(財)コースワーカー能力開発協会宮崎県支部では、昨年度に引き続き、平成16年度においても「JICA青年招へい事業」を企画し、ベトナム青年の受入を行いました。本事業の目的は、ベトナム青年が自国の地域振興を立ち上げる知識と技術の取得が出来る実務的な研修プログラムや帰国後の活動を支えるための合宿セミナー、ホームステイプログラムを実施し、日・越間の相互理解と交流を深め、今

後の友好促進と支援協力の基盤整備を図るものであります。

平成16年度は、6月7日～6月22日の16日間、ベトナム青年25名（男性17名、女性8名）を招へいして、「環境・保全」をテーマに研修を行いました。

以下、その研修の概要を報告し、皆様方のご協力に感謝を申し上げますと共に、今後ともご指導方をよろしくお願い申し上げます。

## 1. ヴィエトナム環境保全グループ研修日程

平成16年度「JICA青年招へい事業」宮崎県受入（実績書）

◆第5陣ベトナム環境保全 ◆人数：25名 ◆宮崎県受入期間：6/7～22（16日間）地方一貫団体：財団法人コースワーカー能力開発協会宮崎県支部

月/日	曜	時間	日程	視察先・内容等
6/7	月	09:05 10:00～12:00	宮崎空港 到着 視察	JICA大阪国際センター 宮崎県総合博物館（2グループで見学）
6/8	火	09:00～12:00 14:00～17:00	講義 〃	日本の森林・林業と環境政策（宮崎大学農学部） 宮崎県の環境保全政策（宮崎県環境森林部）
6/9	水	08:30～11:30 14:00～14:30	講義 表敬訪問	環境教育（長崎大学医学部） 宮崎県副知事
6/10	木	08:30～11:30 13:20～13:50 14:15～14:20	講義 公開講座 閉会	日本の食糧生産の基本（宮崎大学農学部） ベトナム紹介（南部・中部・北部） お礼の挨拶・記念品交換
6/11	金	10:30～12:00 14:30～18:00 18:00～20:00	視察 事前協議 セミナー開講式・懇談会	環境関連施設（大淀川学習館） セミナー打合せ・オリエンテーション・リハーサル ホテルマリックス2階
6/12	土	09:00～11:00 13:30～16:30 18:00～19:30	基調講演 ワークショップ 交流の夕べ	環境人類学（国立民族博物館） テーマ別分科会 3グループ マリックス2階（ベトナム・宮崎文化交流会）
6/13	日	09:00～12:00 13:00～15:00 15:00～16:00 16:00～16:30	ワークショップ 〃 成果発表 セミナー閉講式	テーマ別分科会 20名×3グループ テーマ別分科会 各分科会発表 みやざき市民プラザ4F
6/14	月	08:00～12:00 13:00～18:00	自主研修 〃	オピション（市内見学） オピション（市内見学）
6/15	火	09:30～12:00 15:00～17:00	視察 講義：視察	綾町（照葉樹林・地域振興など説明） 風力発電他（都城工業高等専門学校）
6/16	水	09:00～12:00 15:00～16:20 16:20～17:00	視察 講話 見学	大気汚染モニタリング 水俣病公害の実態（2F 講堂） 水俣市水俣病資料館
6/17	木	10:00～12:00	視察	都城市浄化センター（清浄館・清流館）
6/18	金	10:00～12:00 13:00～16:00 18:00～19:00	文化体験 〃 歓迎レセプション	着物着付教室（会場-A） 茶道教室・和琴教室（会場-B） ホテルプラザ別館3階
6/19	土		各家庭	ホームステイ
6/20	日	13:30 14:30 16:00	出発 到着 チェックイン	宮崎空港 伊丹空港着後バス移動 大阪東洋ホテル
6/21	月	09:30 13:30	視察 〃	大阪歴史博物館 大阪市ごみ処理工場（平野工場）
6/22	火	11:00～12:00 15:00～17:00 18:00	視察 〃 チェックイン	環境関連施設（清水寺） 環境環境関連施設（鹿苑寺） JICA大阪国際センター

## 2. 参加者の一人 Mr.グエン ソン ハー（ホアビン省公務員）君の研修報告（6月10日）

### 〈農業の基本に学んだ環境保全〉

私は、ホアビン省で青年に対する健康や環境保全の促進運動及び人口増加を目的としたプロバガンダ（啓発活動）に取り組んでいます。

来日する前から、JICAの青年招へい事業で日本の文化や生活習慣そして政府ならびに関係機関の環境政策や環境問題に関する知識を深めたいと考えていました。

幸運にも宮崎での研修プログラムは、永田先生から人の生命にかかわる食と農に係わる講義を受け、日本人の食に対する安全性と安心感についての基本的な考え方を学ぶことができ大変感謝しています。

輸入大国である日本は、中国の生産農家の経験や知識不足と指導者及び組織的機能が無いこと、輸出前の残留農薬検査が実施されていないことに危機感をつのらせる。こうした状況を改善するため、日本政府は食品の安全確保の政策として、食と農の再生プランと法整備を確立させた。

内容としては、農産物表示の偽装や非登録農薬使用を禁止、そして、残留農薬・環境ホルモン・ダイオキシンなどを低減、また、BSE、O-157問題など生産現場から流過程で防止することで消費者を守るシステムである。

また、輸入野菜に対抗するために生産・流通の面から野菜栽培など農業の構造改革が推進され、産地の地形・気候風土などの実情に応じた戦略を選択することによって、国際競争力のある野菜産地の確立を目指している。

私たちは、JAS法による日本政府の品質管理の厳しさに驚くとともに、この政策は作物に適した環境を与え、生産者と消費者が相手の立場で食物と農業

を考えることの大切さを学んだ。

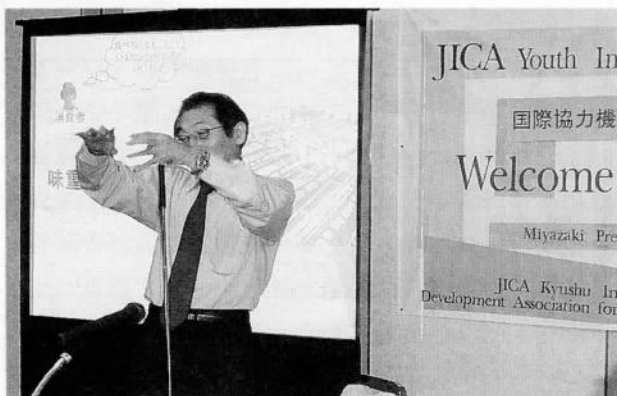
以下、「食品の品質表示の義務化」の講義メモです。

消費者の権利と生産者の義務として、一般消費者向けのすべての飲食料品につき生鮮食品には原産地名、加工食品については原材料などの表示を行うことがJapanese Agricultural Standard（JAS法）で制定。この品質表示基準制度は、製造業者などに対し次の通り適正な表示が強制的に義務付けられているのである。

- 農産物名：名称・原産地名
- 水産物：名称・原産地名・解凍・養殖
- 畜産物：名称・原産地名
- 玄米・精米：名称・原材料名・内容量・精米年月日・販売業者などの氏名または名称・住所・電話番号
- 加工食品：名称・原材料名・内容量・賞味期限（品質保存期限）・保存方法・製造者などの氏名または名称・住所
- 遺伝子組み換え食品の表示
- 有機食品の表示

尚、今回の講義で最も関心を持ったのは、永田先生が研究開発されている、非破壊による農産物の品質管理と品質評価システムでした。現在、農産物を人の視覚で検査されていますが、近赤外線画像や光の波長画像を使って、野菜やフルーツに直接触れずに解析できるのです。この検査方法で、異物混入や残留農薬そして果形、大きさ、着色度、着色の均一性、傷、病害虫傷、生理障害、変色、腐敗、糖度・酸度・果実の質・果汁量・栄養成分などが自動的に解析され、瞬時に評価できる画期的なものでした。

私は、今回学んだ貴重な経験と知識をヴェトナムの公務員や国民に伝え、農業や環境保全運動に携わっている人々に適切な指導をしていきたい。そこ



永田先生による講義



永田教授に青年代表から記念品贈呈



真剣に講義を受けるヴィエトナム青年25名

で、命を慈しみ重んじる心を育て、共存共栄できる社会を構築することを強く願っています。

永田先生そして関係者の皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたします。ありがとうございました。

翻訳：Dr. Tran Dan Xuan

(元)宮崎大学大学院留学生

編集：(財)ユースワーカー能力開発協会宮崎県支部  
理事 熊本 淳夫

### 3. ビンロン村プロジェクトについて

(財)ユースワーカー能力開発協会宮崎県支部では、ヴィエトナムにおける貧困削減のモデル事業を開始するため、2000年から2004年までの4年間の間に7回ほど現地に出向き、詳細な調査を行ってきました。8回目となる今回は、2005年2月1日から18日の間、再度の調査のために出張し、これまでの調査成果をもとに、タイウエン大学担当者と地元住民とで詳細な協議を行い、新たに40haの果樹と野菜との複合栽培園を開園することが取り決められました。

本プロジェクトは、地元住民からの要請を受け、ヴィエトナム全国から大きな関心と期待が寄せられています。今後、本プロジェクトが軌道に乗るためには、JICA草の根技術協力事業を通して更なる発展を関係者一同願っております。

以下に本事業の概要を記します。皆様方のご支援をお願い申し上げます。

#### (1) 背景、現状、問題点

越国の全国統計調査では、約1,750の農村が最貧民村に指定されていますがその最貧村の一つが対象地域のビンロン村です。

このビンロン村は、タイウエン省ボーナイ郡(Vo Nhai District Thai Nguyen Province)北部

の高原地帯でハノイ市から約150kmタイウエン市より37km、ボーナイ郡の中心部から約23km離れた農業地域です。

この地域にはタイ族、ナン族、ダオ族、カオ族、ラン族、サンドウ族そしてキン族が分割して定住しており、民族間の対立や農業関連の様々な課題を抱えた非常に難しい村ではありますが、其れなりの手応えのある現場だと捉えています。

春夏秋冬の四季がありますが春に集中して雨が降るだけで年間降雨量(資料-2)も少なく、田植えシーズンになると農民は毎日空を見つめ雨乞いする、厳しい気象条件の下で米を生産(1期作)しています。

また、田畑の土壌は資金不足や肥料不足で痩せており、生産方式は古く非能率的で野菜など殆んど生産されていません。住民の年間平均所得はヴィエトナム国平均の4分の1のわずか95US\$です。しかし農地を耕作できない45%の住民は殆んど収入がなく、食料の自給さえ出来ず餓えながらの日々を過ごしている状況です。

当協会では、この様にあらゆる面で厳しい状況下に置かれている地域住民のために2001年に「みやざき・ビンロン村共同果樹園プロジェクトを開始しました。本事業の目的は、地域住民主導の村興しであり、果樹園から収穫(豆類などの短期換金作物を除く)した果実の20%は村の社会福祉事業や教育・保健医療費、残り80%を住民が分かち合う、試験的な地域開発プロジェクトです。

事業内容としては、ライチ・リヨンガンの樹種を住民がボランティアで植え付けて、その樹木の間に短期換金作物の豆類を栽培しながら土壌改良を行い、また水牛など家畜の侵入を防ぐ生垣には農業機械エンジン用の油を抽出できる樹木を植栽しております。

特に、越国のライチは楊貴妃が好んで食したと云われる程美味しく将来は、ハノイ市やホーチミン市などの国内流通や、香港・シンガポール・ヨーロッパへの輸出も視野に入れた販売戦略を考えています。

この果樹園の、樹種選定や植付指導などはタイウエン大学からの協力を得て順調に進められており、最近ではようやく本事業の趣旨が住民に理解され数多くの住民が参加を希望しています。

#### (本事業計画の経緯)

① 1997年から2000年「青年招へい事業」ヴィエトナム教育グループを受入れ。宮崎・ヴィエトナム

開発教育・国際理解研究大会を開催し、ベトナム国の貧困地域の状況及び教育事情を理解。青年から教材などの支援協力について要請を受ける。

#### (可能性調査の実施)

- ① 2000年12月、第1回ベトナム調査グループ5名をハノイ市・タイウエン大学、ビンロン村に派遣し、本事業の計画(案)の説明や現場調査を行い村長・小中学校長・婦人代表・青年代表などと事業計画案について協議。
- ② 2001年9月、第2回ベトナム調査グループ2名を派遣しビンロン村住民との意見交換及び果樹の植付け状況視察などを実施。
- ③ 2002年3月、第3回ベトナム調査グループ4名を(JICAアフターケア調査)派遣し、帰国青年同窓会・JICA事務所・日本大使館・日越人材センターなどの訪問やビンロン村住民との意見交換及び果樹園の状況調査を実施。
- ④ 2002年8月、第4回ベトナム調査グループ2名を派遣しハノイ南部の農業共同組合を訪問。設立の目的、キュウリの塩干付や瓶詰ピクルスなど農産物加工の調査を実施。
- ⑤ 2002年10月、ベトナム第5回調査を実施し、ラオカイ省など北部山岳地帯の中規模(200ha)の農業プロジェクト状況視察や少数民族の農林業実態調査を実施。
- ⑥ 2002年11月、ベトナム第6回調査グループ12名を派遣しハノイ市内の市場調査、クアンニン省の農水産業などの実態調査及び竹炭製造者や竹工芸の技術者などとの情報交換会を実施。
- ⑦ 2003年8月、ベトナム第7回調査で1名をビンロン村へ派遣し、果樹や豆類の生育状況を調査。住民側から共同果樹園を40haに拡大したいとの要請を受ける。

#### (2) 事業の必要性・妥当性

ビンロン村の気候風土に合った、果樹・野菜・根菜類・マメ類、キノコなどの栽培指導を行い、計画的な農産物の生産を開始する。食糧の確保と安定した収入を持続的に得るため、安全で美味しい高品質の作物を生産する農法の確立が必要であり。そのためには有機質培養土作り・果樹の品種改良・育苗・栽培技術・農業経営などの研修を実施するとともに、農業先進国の課題や問題点などの情報を地域住民に与えて意識改革を図ることが最優先課題である。

研修プログラムは、タイウエン農林業大学と連携して定期的なセミナーの実施や、栽培技術の現地実習を行い、人材育成として地域の農業青年リーダーの養成や、またビンロン村に国内外からのスタディツアーや視察団などを受入れるなど再交流事業を促進しながら、住民主導型の地域振興モデル事業の理解と支援体制(農産物の食品加工・流通など)の基盤づくりを行う。

こうした、支援体制を強化するため宮崎のホストファミリーやプログラム関係者などを中心に、「宮崎・ベトナム親善協会」を設立し、組織的な親善使節団をベトナム派遣したり、また毎年実施している宮崎とシンガポールの教職員・中高校生のスタディツアー(毎年約100名)をベトナムにも派遣し3ヶ国相互交流を実施するなどの地域発信型の国際交流や国際協力を計画したいと考えております。

このような事業を実施することで、日・越青年の人材育成ならびに両国間の相互理解と連帯感が深められ、同時に住民の国際化と意識改革によって住民主導による「村おこし」となって、食糧の自給や雇用拡大、安定した収入が確保され村全体の発展に繋がる。そして教育・医療、社会福祉などの基盤整備など住民の手によって確立されると考えております。

本プロジェクトの基本的な考え方や、実施方法、プロセスなどは越国青年たちと長年にわたり協議してきたものであります。

この「青年招へい事業」から芽生えた、共同果樹園事業はビンロン村の住民だけでなく、越国内で最貧村として位置付けされた1750ヶ所の住民に対しても大きな希望と無限大の可能性を与えられると確信しており、是非ともこの事業を成功させたいと願っております。



### ピンロン村の優良農家



### 共同果樹園モデル事業開始

JICA 青年招へい事業 再交流プログラム



ピン教習による耕作指導



みやざきピンロン村・共同果樹園事業 (DATE1998)

### 第2回調査 2001,12,13



### JICA再交流促進調査2002/3/22



佛国青年同窓会役員会議

### 第3回ピンロン村調査 2002/3/25



ポーナイ郡長・ピンロン村長との会議

### 宮崎ピンロン村共同果樹園全景



モデル事業用地西側 2002/3/25 撮影

### 第4回調査 2002/8/22-28



イエンバイ省



ハータイ省



中華人民共和國

ミャンマー

タイ

カンボジア

ラオス

ベトナム

### 第7回調査 2003年8月



果樹・豆類栽培状況

2003.8.10



果樹生育・管理状況調査

住居を兼ねた監視小屋 2003. 8. 10



果樹の初収穫

JICA第7回調査で、ビンロン村に渡り果樹・畜産指導など4の地域開発プロジェクトを支援される

4年目の喜び、ようやく実ったリョンガン(緑豆)の果実「みやざき・ビンロン村共同果樹園」 2003. 8. 10

## 雑 感

会 員 吉 山 武 敏

昨年は台風の当り年で、当地にも3回上陸しました。国内各地で大きな被害があり、新潟地震、スマトラ地震と巨大津波の被害、その他、尽きることのないイラク紛争、北朝鮮による拉致問題など、国内外で暗いニュースが多かったように思います。我が家でも竹の倒伏がひどく、いまだに後始末が終わらない有様です。又、JICAの仕事でタイにいた時、プーケットに行ったことがあります。インド洋に面した美しい平和な海岸が、一瞬にして地獄と化したとのニュースに驚き、自然災害の恐ろしさを再認識させられました。

田舎に住んでいると、国際交流の場も少なく、10

年位前から町役場にALTとして派遣されてくる外人による、月2回程度の英会話教室を覗いたり、又、昨年から町主催で始められた月1回の国際交流教室に顔を出しています。これまでに、オーストラリア、イギリス、フィリピン、南アフリカなどの出身の人から、5回に亘って、それぞれの国の正治、経済、文化、生活様式などを紹介してもらい、大変興味ある情報を得ることが出来ました。

年1回の宮崎での集まりで、皆さんの元気な顔を拝見し、各分野で活躍されている方々から、最新の情報をお聞きするのを何よりの楽しみにしております。

### 編集後記

JICAエキスパートみやざき第7号(宮崎県JICA派遣専門家連絡会会報)をお届け致します。

宮崎県JICA派遣専門家連絡会は、昨年、結成10年目を迎えました。これを機に、担当役員も一新し、新会長として永田雅輝(宮崎大学農学部)、幹事として位田晴久(宮崎大学農学部)、山本正悟(宮崎県衛生研究所)、大野和朗(宮崎大学農学部)の4名が世話係になりました。どうぞよろしくお願い致します。

連絡会では、会員の方々の専門家としての経験を活かして、県民の皆様方のお役に立てるように国際協力の種をまき育てていきたいと思っております。

会報が会員相互の連絡を密にし、本会の発展につながれば幸甚です。会報へのご提案、ご寄稿を頂きますようお願い申し上げます。

(幹事記)